

研究主題「わかる喜びのある読解指導

- 説明的文章教材における学習過程の工夫 - 」

東京都教職員研修センター 研修部 教育開発課
昭島市立中神小学校 教諭 安孫子佐都子

研究のねらい

平成20年1月に、中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改訂について」（答申）が示された。その中で、今回の学習指導要領改訂では、「現在の子供たちの課題への対応」という視点から6点のポイントが示され、その中でも「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」の4点が重要であるとしている。

この4点の視点の基盤となるものは「基礎的・基本的な知識・技能の習得」である。中でも説明的文章の読解においては、教師は子供に段落の文章を要約し、段落間のつながりなどの文章構成を理解する力を習得させ、自分の力で文章を正確に読み取り「わかった」という実感をもたせ、意欲を高めていく指導を考える必要がある。

また、説明的文章を読解する力は、情報を活用し、これからの社会を生き抜くために土台となるものである。大切なのは、「わかる」喜びを原動力とし、意欲をもち、活動していくことだと考える。

そこで、本研究では、特に説明的文章の読解の過程を、子供が「わかる」までの構成要素として分析し、その構成要素を基に学習過程を工夫することによって基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、その結果、子供に「わかる」喜びが生まれ「生きる力」を身に付けていくことになると考えた。このことは学習意欲の向上や思考力・判断力・表現力等の育成の重要な条件であるとして、本研究主題を設定した。*本研究では、「分かる」は「わかる」と表記した。

研究の内容と方法

研究の仮説

子供が説明的文章を理解するまでの段階とつまずきに対する教師の指導の工夫の在り方を明らかにし、それに基づいて学習過程を工夫することで、子供に「わかった」という実感をもたせ、読解の目標を達成させることができる。

研究の内容

- 1 「わかる」までの段階を明らかにした。
- 2 1を基に学習過程を工夫し、「わかる」ために必要な手だてを整理した。
- 3 「わかる」ための指導の工夫を明らかにした。

実践研究

第3学年の教材「すがたをかえる大豆」の学習指導案を作成し、「わかる」までの構成要素を含んだ学習過程の工夫と手だての有効性について検証授業を行った。

1 基礎研究・・・「わかる」までの段階について（文献研究）

- ・人間が情報を取り入れる仕組みなどから「わかる」までの段階を分析した。
- ・認知の脳科学の視点から、「わかる」ための活動を分類・整理した。
- ・説明的文章の学習指導方法に関する先行研究を分析し、「わかる」ための構成要素・段階を整理した。

子供が「わかる」ためには、言葉の意味や知識を理解しものごとの関係や規則性に気付いてまとめ、全体像のイメージをもつことが必要である。そこで、それらの構成要素を右の4点であると考えた。

- 「わかる」までの段階
- 1 「意味がわかる」
 - 2 「組み立てがわかる」
 - 3 「まとめることができる」
 - 4 「わかったことから考える」

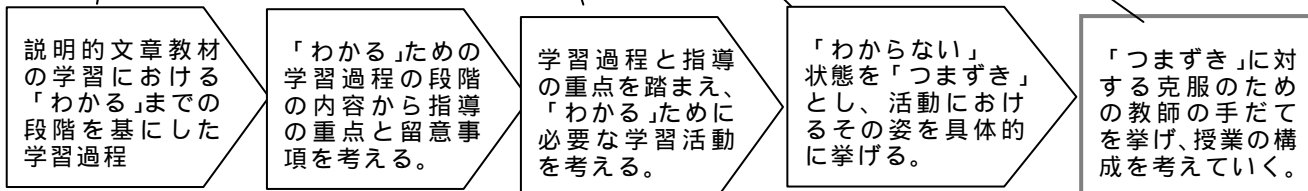
2 「わかる」ための教師の手だての明確化について

(1) 「わかる」までの段階を基にした学習過程の工夫

読解における学習活動の目標を達成させるために、「わかる」までの段階を基にした説明的文章教材の学習過程と具体的な教師の手だてを整理した。教師が見て「わかる」までの構成要素を含んだ学習指導計画及び学習指導案を作成し、教師の具体的な手だてを取り入れやすくした。

「わかる」までの段階を基にした説明的文章教材の学習過程と具体的な教師の手だて

段階を基にした学習過程	指導の重点と留意事項	学習活動	予想される子供のつまずき	具体的な教師の手だて
1 意味がわかる (意味を知り得る段階)	言葉の意味や知識を重視し、辞書や動詞、対話、具体化、提示等、写真の提示を行い、イメージを進めていく。	・新出漢字を読む。	・新出漢字の読みがわからない。	・読み方を教える。
		・言葉の意味を理解する	・言葉の意味がわからない。 ・知識に関する発問に答えられない。	・絵や具体物を提示する。 ・写真等でイメージ化を促す。 ・動作化によりイメージ化を促す。 ・国語辞典等の活用法を指導し、使用する時間をとる。 ・対話により、意味を教える。 ・子供同士の話し合う場を設定する。



(2) わかるための指導の工夫について < 導入の工夫と学習マップの提示 >

「意味がわかる」段階では、「言葉の意味がわかる」ことと、何のために学習するのか、つまり「学習のめあてがわかる」段階が含まれている。何を学習するのか、何のために学習のかを子供自身が導入段階でしっかりと把握することが大切である。

そこで「言葉の意味がわかる」ために導入の段階では、映像の活用や体験からの想起などのイメージ化を重点的に行い、説明的文章教材の学習と自分とのかかわりを明確にすることを重視した。

また「学習のめあてがわかる」ために「学習マップ」を提示することとした。読解の道筋を学ぶことは、自力での読解を行い主体的に学習に取り組むための見通しをたてる目安になる。「わかる」までの段階別学習過程を子供用に表し、導入時に提示するとともに段階を確認しながら学習を進めた。説明的文章教材における学習の共通の道筋として他の教材でも使用していくことによって、子供の中に定着を図っていくことが大切であると考えた。

3 実践研究（検証授業）

(1) 学習指導計画の作成

説明的文章教材「すがたをかえる大豆」(3年)の指導計画(全7時間)			
時	学習段階	ねらい	学習活動
	意味がわかる	「食べ物がかせ」になるために、大豆について関心を持ち、自分の知識や体験と言葉の意味を結び付け、イメージをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 「食べ物がかせ」のイメージをもち大豆について知っていることを発表する。 文章を読み、わからない言葉の意味を調べる。
	組み立てがわかる	説明文を読み、段落のつながりと構成を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> グループで文章全体の段落を「はじめ」「中」「終わり」に分け、分けた理由について話し合う。
	まとめることができる	「すがたをかえる大豆」を読み、形式段落のキーワードを基に、内容を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> 段落からキーワードを見付け、内容をまとめ、整理していく。
	わかったことから考える	文章全体から筆者の言いたいことがわかり、調べ学習などにつながる自分の考えをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 文章全体を読んで筆者の伝えたいことを考え、自分の感想をもつ。

(2) 段階別の指導の工夫

「意味がわかる」段階

「すがたをかえる大豆」の文章を読み、わからない言葉を見付け、意味を調べる学習活動の時間をとった。子供のつまずきは、主に言葉の意味がわからず、イメージがもてないことである。それに対して視覚的な資料の提示や対話を取り入れ、子供の体験と結び付いた知識となるために動作化を取り入れた。

「組み立てがわかる」の段階

段落を「はじめ」「中」「終わり」に分ける話し合い活動を取り入れた。「何を基に分けるのかがわからない。段落の役割に気付かない。指示語、接続語の役割を知らない。」というつまずきに対して文章が3部構成になっていることを初めに示し、指示語・接続詞の役割に気付かせ、段落を分ける視点を明確にした。段落の内容と関連した絵や図を使い、子供と共に内容においてのまとめりやつながりを確認しながら、ワークシートにまとめた。

「まとめることができる」段階

手だてとして段落の中から大切な文を選ばせ、その理由を考えさせた。キーワード及びその探し方がわからないということがつまずきとして挙げられるので、キーワードを見付ける視点を与え、段落の内容をワークシートに整理していった。筆者が読者に伝えたいことがあって書いた文章であることを確認し、題名との関連、具体物との関連、繰り返し出てくる言葉などから大切な言葉を見付けていく視点を示した。

「わかったことから考える」段階

筆者の言いたいことを考えさせるため、選択肢を提示し、文章に基づき選んだ理由を話し合わせた。読後の感想がもてないというつまずきに対しては、「食べ物がかせ」の素晴らしいところや教えてくれたことをどう思うかなどの視点を与え、考えさせた。

(3) 自己評価の活用

授業分析から、意欲の高まりの変化について見ることができ、その要因について考察した。

また、本時のねらいに関する理解についての自己評価と教師の評価の差異を分析シートに記入した。評価の差異については、子供の努力を認めたり、個別指導や次の時間に確かめの活動を入れたりする等、評価を具体的に伝えることで学習指導に生かした。

研究の結果と考察

1 授業の分析方法

学習活動をビデオ撮影と授業観察記録を基に授業を分析・整理した。「学習活動」「教師の発問と子供の反応及び考察」「意欲の高まりの変化(5段階)」「学習のねらいについての理解とその反応」を視点としワークシートに自己評価も記入させた上で教師の評価との差異も分析した。教師の評価と子供の自己評価の差異から手だての有効性を検証し指導の改善を図ることとした。

2 考察

(1) 意味がわかる段階では子供が絵や写真を基に体験を想起して言葉をイメージしたり子供同士の対話から言葉の意味をとらえたりすることができた。動作化も意味の理解を助けていた。また、子供のイメージは教師の発問に左右されることが多く、どの段階においても十分な意図をもち発問を練り上げておくことが必要であることを再認識した。

(2) 組み立てがわかる段階では友達の意見を聞き、話し合ったりする活動から「わかった」と実感する子供が多く見られた。段落構成の視覚的資料も有効であった。

(3) まとめることができる段階では、音読によって様子を表す言葉を確認していくことにより、言葉の意味とイメージをつなぎ、段落の構成や内容の理解を深め、まとめる活動を助けた。

(4) わかったことから考える段階では、文章全体を振り返り段落内容をクイズ形式で確認する、筆者の伝えたいことを理解するために選択肢を選び理由を考える、といった学習活動により「わかった」ことが整理され、まとまっていった。

3 成果

(1) 「意味がわかる」の段階から意欲が高まり、日ごろ、理解が十分でない子供もまとめの確かめテストでは、正しい答えを出すことができ、段階別学習の効果があつた。

(2) 「組み立てがわかる」では、段落分けの理由を指示語、接続語から考えることができ、構成を考える上での視点が増えた。

(3) 自己評価と教師の評価の差異を分析することで、見やすくなり評価と指導の一体化のポイントが明確になった。

今後の課題

1 文章の構成や文中から筆者の言いたいことを見付けるための手だての工夫

2 子供の自己評価と教師の評価の差異を縮めていく手だての改善

